

単元名

原のくらしから学ぼう

【関連のある SDGs の目標】



【本質的な問い】（何度も問い直され答えが更新され続ける「問い」）
◎ふるさと原のよさとは、何だろうか？

【単元を貫く問い】（単元を通して考え深めていく「問い」）
●ふるさと原のよさを発信するには、どうしたらよいだろうか？

【単元の目標】
お米について、観察したり調べたりする活動を通して、自ら課題を発見し、追求する。また、稲刈りなどの体験活動を通して、地域のお米を育てている人の苦労や願いを知り、地域に愛着を持つとともに、地域のために自分達ができることを考え、実践する。

【連携諸機関・人物】
・地域の方々
（田中 修二様 他）
・ハラっぱマルシェ実行委員会
（玉田 梨乃様 他）
・保護者の方々

学習活動のアピールポイント

原小学校では、伝統的に地域の方から田と畑を貸していただいて、1～4年生が米作り、1・2年生がサツマイモ栽培を行っている。今回、3・4年生は『原のくらしから学ぼう』の単元で、地域のイベント「ハラっぱマルシェ」において、収穫した米を販売する活動に取り組んだ。計画については児童に委ね、児童が主体的に販売に必要とする情報やものについて調べ、問題点の解決に向けて具体的な計画を立てられるようにした。特に4年生は、昨年出店した経験を活かし、計画の改善や3年生へのアドバイス等が主体的に行える、異学年交流のよさが生かせる活動となるよう工夫した。

<稲作体験 1～4年>



活動風景



- ・計画を立てる段階から児童に委ね、児童が主体的に興味・関心のある事柄について協力して調べ、体験し、発信できる学習形態をとった。
- ・総合的な学習の時間の活動を中心に、国語科の作文や話し方、社会科のスーパーマーケット見学、算数科の計量や、理科の植物についての学習、図画工作科の箱の組み合わせによる工作等の既習事項を生かせるように横断的にカリキュラムを工夫し、学習をスパイラルで深めていけるようにした。
- ・学級全体で協同的に活動できる場面を設定し、力を合わせて成し遂げていく喜びを得られるようにした。
- ・地域学校協働本部を中心として、地域の方々の協力を仰ぎ、児童がやりたいこと、体験したいことが最大限実践できるようにした。
- ・感謝の気持ちをもって活動できるよう、地域の方々の協力があって活動ができていることや道徳で学んだことを身近に生かせることを助言した。

児童生徒の成長した姿（○）	児童生徒による振り返り（◇）
○ふるさと原の自然を生かしたもち米の素晴らしさと、稲作を守り受け継いでこられた方々の努力について改めて感じ取り、児童が地域に対する誇りや愛着を得ることができた。 ○米の価格をスーパーマーケットで調べてきたり、米作りでかかった経費を考えたりと、商品の価格がどのようにして決まっているのかについて、学びを深めることができていた。 ○出店に向けて話し合い、準備をしていく活動を通して、意見の相違から合意に至ったり、得意な分野を生かしてみんなで補い合ったりする、協働的な活動を行うことができていた。 ○自分たちの主体的な活動を貫いて成功した体験を通じて、児童が自分たちで考えて行動していくことに自信をもつことができた。 ○販売を通して、大きな声で客を呼び込んだり自分で考えて作業効率を改善したりと、成長してゆく姿が見られた。 ○４年生は昨年の経験を生かして３年生をリードし、３年生は活動の中で主体的に活動する姿を学ぶという、異学年交流のよさを生かした活動ができた。 ○地域の方々に支援していただき、Instagram発信など新しい地域連携の形を作ることができた。 ○お世話になった方々に、米販売の収益からお返しをしようとするなど、感謝の気持ちを表現できた。	◇米作りは大変だったけど、きれいな白いお米になったのを見たとき達成感を感じた。 ◇米作りにはたくさんの時間と作業が必要だとわかった。昔の人は手作業で脱穀などを行っていたからすごいなと思った。 ◇お米を計量したときに算数の「重さ」の学習がすぐに役に立って、算数の必要性を実感した。 ◇ポン菓子を作ってお客さんに配ったとき、たくさんの人が笑顔になっていて嬉しかった。原のよさを知ってもらえたのではないかな。 ◇店名や米の名前を自分たちで話し合って決めたことで、自分たちのオリジナル感があり、がんばって売りたいというやる気が出た。 ◇FMはつかいちの番組に出演したり、Instagramに出演したりして自分たちの声をたくさんの人に聞いてもらえたのが嬉しかった。もっといろんな人に原のよさを知ってもらいたい。 ◇米の販売はたくさん声を出して大変だったけど、売り切ることができて嬉しかった。 ◇自分たちが育てた米を、みんなと楽しく料理して食べることができて嬉しかった。